

講演3

死の概念形成と身体

八戸短期大学 杉山幸子

わたしたちは誰も死を自分で経験してはいない。だが、それがどういうことかを何となく分かったうえで、自分がいつか死ぬということはなるべく意識しないようにして生きている人が大半だろう。では、死についての了解—単に与えられた知識として知っているのではなく、いわば自分の身体でそれを感じとること—はいつ頃、どのようにして形成されるのだろうか。

本論ではこの問題に3つの角度からアプローチする。ひとつは、それを学ぶ重要な場である家庭において、現在、「いのちの学び」はどのように行われているのか。第二に、子どもは日常においてどのような形で死に関心を示すのか。最後に、死の概念の形成に影響を与える要因は何かを探る。

1. 家庭における「いのちの学び」

目的 若林（1986）によると、アメリカでは幼児期から年齢に応じたデス・エデュケーションのカリキュラムと学習目標が設定されているという。日本には幼児教育・保育の枠組みとして、幼稚園教育要領と保育所保育指針があるが、後者には「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く」という項目があり、これが保育の場におけるいのちの学びをほぼ規定しているといえるだろう。

では、現在の日本の家庭において、いのちの学びはどのような形で営まれているのだろうか。本論では、幼児をもつ親が家庭内でどのようないのちの学びを実践しているのか、言い換えると、現代の親はいのちの学びとはどのようなものだと認識しているのかを探り、その内容について検討していきたい。

方法 2007（平成19）年、盛岡市と八戸市の保育園（2園）および八戸市の幼稚園（1園）において、園児の保護者を対象とした質問紙調査を行った。本論では保護者から得られた「家庭でのちや死について教えるためにしていること」の自由記述式の回答の部分进行分析対象とする。回収できた質問紙は計142通であり、この部分の記述が見られたのは96通だった。

結果 すべての回答をエクセルに逐語入力し、データをIBM SPSS Text Analytics for surveys Japanese 4にインポートし、キーワードの抽出を行った。次いで、抽出されたキーワードを吟味して手作業でカテゴリを設定した。

94件のデータから24個のカテゴリを作成した。いのちの学びの「タイプ」を見いだすため、各カテゴリに「当てはまる・当てはまらない」を「1・0」に置き換えたデータを用いて因子分析（主成分分析、プロマックス回転）を行った結果、固有値が1以上の11個の因子が抽出された。累積寄与率は69%であり、因子間に有意な相関は見られなかった。因子得点を基に、各因子（タ

イブ)を代表する回答の記述を表1に示す。

考察 因子のⅠとⅢは宗教に関係するタイプであり、日本の伝統的な教え(死後観)とキリスト教の教えが見いだされたが、どちらも数としてはわずかであった。

一方、因子Ⅱに見られるように、教えの面は衰退しても、墓参りという儀礼はまだ根強く残っており、その機会に亡くなった人について話して聞かせるという、家庭ならではのいのちの学びが行われていることが分かった。また、それをより意識的に行うタイプとして、子どもをあえて葬儀に連れて行くというものも見られた(因子Ⅷ)。核家族化や病院死の増加により、日常生活から死が隔離されていることが問題視されているが、そうした問題意識は現代の若い親たちにもかなり浸透していることが分かる。

因子ⅣとⅩは幼稚園や保育園での学びと共通するタイプである。生き物の飼育については、特に死んだ時に感謝の気持ちをもって土に埋めるということが重視されていた。

因子ⅥとⅪはテレビやゲームと関係したタイプである。いのちをテーマとしたドラマやドキュメンタリーと一緒に見たり、ニュースで悲しい事件が報道されたときに親子で話したりするものと、特にゲームをやる子どもの言葉遣い(「死ね」など)に関わるものであり、どちらも現代ならではの形態といえる。テレビにしろ、あるいは絵本にしろ、メディアを媒体とした学びについては保護者のなかにも否定的な意見があったが、多くの家庭にとってこのあり方が身近なものになっていることが窺われた。

因子Ⅴ、Ⅶ、Ⅸは親から子どもへの語りかけであり、Ⅴは死後観に関するものである。現代の死後観としては、「お空から見ている」が主流であることが窺われる。また、死の概念としては、機能の停止と不可逆性がポイントになっていた。すなわち、親が子どもに死について説明しようとする場合、「死んだら何もできなくなる」ことと、「死んだら生き返らない」ことが重要だととらえられていた。死の概念のもう一つの要素である普遍性については、子どもから聞かれた時に答えることはあるとしても、親から子への語りかけの中には出てこなかった。「あなたも私も、誰もがいつかは死ぬのだ」ということを幼児に言葉で説明するのは困難であり、やはり本来は家族の老いや死を間近に見ることで感じ取られていくものだろう。だが、核家族化が進んだ現在、それができない家庭が増えているのが実状である。

表1 家庭でのいのちの学びの各因子の代表的記述

因子	記述
I. 伝統的な教え	一緒に植物を育てたり、祖母と2ヶ月に1回くらいのペースでお寺に行く機会があるので、「死んだらこのお墓に入って別の世界へ行ってしまうこと、お父さん、お母さんとは暮らせないこと」を <u>地獄絵図</u> などを見せて話している。 死んでから、 <u>えんま様</u> に会って、悪い事をしていないか調べるんだよ、と話している。自分のルーツを家系図にして話したことがあります。(自分がどのように存在するのか)
II. 死者・墓参り	自分の親が早くに亡くなったので、子供が小さい頃から <u>お墓参り</u> に行っている。その時に、おじいさんは死んでしまったので会うことはできないけれど、いつでも守ってくれているということを話している。子供はまだはっきり理解できていないが、死ぬことについて聞かれた時にはちゃんと話すようにはしている。 特に教えた事はないが、 <u>祖父</u> が亡くなっているので「死んで天国にいるんだよ」と言っている。子供は <u>お墓参り</u> に行くと「おじいちゃん元気してるかな?」と言いながら手を合わせている。
III. キリスト教	人は死を迎えても魂は永遠に生き続けること。毎日に <u>教会</u> へ行くので、自然と神の存在や天国について受け入れている様です。
IV. 生き物の飼育	飼っていた <u>金魚</u> が死んだ時、いっしょに庭に穴を掘って埋めてあげた。それ以来、テレビとか話のなかで、「死んだら <u>金魚</u> さんのように <u>お星さま</u> になるんだね」と言うようになった。死んで、 <u>天国</u> に行くんだよ、と言うと、涙を流しながらさよならをしている。 子供がつかまえた <u>昆虫</u> などが死んでしまった時は、「 <u>ありがとう</u> 」と「 <u>ごめんね</u> 」という気持ちを持って、供養する(<u>土に返す</u>)様にさせている。
V. 空から見守り	知人が亡くなり、お葬式に行く時にはお別れをしに行く事、体は動かなくなっても心(魂)は存在していて、 <u>お空</u> の高いところから <u>見守</u> ってくれてる話をした。 子供が3歳頃に、 <u>叔父</u> を亡くしました。その時に「 <u>叔父ちゃん</u> 死んじやったよ。 <u>悲しいね</u> 」と子供に話すと、とても悲しそうな顔をしてました。いつもは <u>やんちゃ</u> で元気なのに、周りの様子も子供ながら悲しそうと感じてたようです。あとから「 <u>叔父ちゃん</u> は、 <u>お星さま</u> になって空からみんなを <u>見てるよ</u> 」と教えました。納得したような顔で、天井を見上げてました。
VI. テレビ	テレビで「 <u>小児病棟での闘病記</u> 」とか「 <u>貧しい国での苦しい生活の様子</u> 」などがあるときは、一緒に見て、話をするようにしている。 毎日、 <u>TV</u> のニュースで殺人や自殺、虐待などが放送されています。できれば子供の目や耳に触れさせたくないと思えます。が、そうもいきません。これが現実、今の世の中であるのなら、そんなニュースなどと一緒に見た時は、「これは、当たり前のことではないよ、命は大切だよ」というふうな言葉を、何回でも話します。
VII. 機能の停止	教えるというより、 <u>祖母</u> 、 <u>祖父</u> が他界しているので、自然に話が出る。「死んだら、もう逢えなくなって、話もできなくて、 <u>さみしいね</u> 。だから、あなたが死んだら、ママやパパも友だちも <u>かなしく</u> て、 <u>さみしい</u> んだよ」など…。 死ぬということは、その人や生き物と遊べなくなる(会えなくなる)ということと教えています。「 <u>さみしいね</u> 」「 <u>かなしいね</u> 」とか子供に分かるような言葉で説明してあげています。
VIII. 葬儀に参列	<u>法事</u> や <u>近親者の葬儀</u> など、できるだけ参加させ、体験させるようにしている。 年末に身内で死産した人がいて、その時に赤ちゃんが死んじやったということを教えた。特に死について話すことはないが、不幸があれば <u>葬式</u> にも行くし、なんで亡くなったかということも伝える。
IX. 不可逆性	死ぬということは、…(中略)生きていないこと。死ぬともう生きていけないこと。(祖父が亡くなった時に息子に説明) かたつむりもどじょうもトンボも心臓があって元気に生きている、とてもだいじないのちをみんなもっていることなど…
X. 絵本	4歳になったばかりの子が「 <u>おたばあさん</u> 」という <u>絵本</u> を読んだ時に「死んじやうといなくなっちゃって淋しいね」と言っていた。 「いのちの大切さ」というのは、「他人や自分を大切にすること」とつながっていると思うので、まずはお友だちを大切に仲良くできるように表現していけたらと思いながら接している。いいなーと思う <u>絵本</u> (昔話etc.)はよく読み聞かせする。
XI. 言葉	最近、TVのマジレンジャー、ボーケンジャーを見たがり、見せると「 <u>殺る!</u> 」とか「 <u>死ぬ!</u> 」とか <u>良くない言葉</u> を覚えてしまい、見せたくないと思った。意味が分からず使うので困る。 「 <u>死ぬ</u> 」という言葉を軽々しく使わないように話した事があります。生きたくても生きられない人がいる事、今自分がこうしている幸せなど話しました。

2. 死への気づき

目的 死の概念の研究としては、普遍性、体の機能の停止、非可逆性などの死の属性を取り上げ、それらの理解の発達を検討したものが多い。たとえば、仲村（1994）は6～8歳の段階でそれらの属性の理解が成立することを示し、高木（2004）は死の普遍性と絶対性（非可逆性）の認識が7歳から確立されるとしている。

では、子どもはどのようにして死の概念を獲得するのだろうか。ここで問題とするのは、誰もがいずれは死ぬということ、一度死んだら生き返らないということ、単に教えられたから言えるのではなく、理解した上で自分の知識としているかどうかである。そして、そのためにはおそらく死を「こわい」と感じる体験—死への気づき—が必要なのではないだろうか。そうした体験を経てこそ、いのちの大切さが理解できるのではないかと思われる。ここでは、子どもがどのようにして死、すなわちいのちの有限性に気づいていくのかを探るため、保護者を対象とした質問紙調査によって子どもが親に死について語ったエピソードを収集し、その年齢、きっかけ、内容を検討する。

方法 2008（平成20）年3月、八戸市内の幼稚園（1園）に協力を依頼し、全園児の保護者を対象に質問紙調査を行った。エピソードについては、まず、「人の一般的な死」（三人称の死）、「具体的な誰かの死」（二人称の死）、「自分の死」（一人称の死）について、それぞれ子どもが話すのを聞いたことがあるかどうか、ある場合は一番早い時で何歳頃だったかを尋ね、それから、その内容についてなるべく詳しく記述するよう求めた。なお、エピソードは在園中の子どもについてだけでなく、兄弟も含めて記述してもらうようにした。

結果・考察 エピソードが「あった」という回答は、一般的な死では53件、具体的な死では67件、自分の死では24件見られた。それぞれの年齢を図1に示す。長子の年齢は6歳までで過半数、11歳までで約9割に達し、最高で18歳までいたが、エピソードの年齢はどれについても3～5歳に集中しており、4歳が最も多かった。この結果は子どもが4歳頃に誕生と死に敏感になるという矢野（2000）の指摘と一致している。

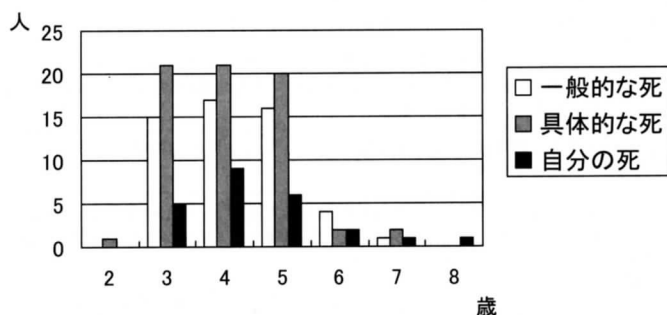


図1 エピソードの年齢

死への気づきと深く関連するのは具体的な他者や自分の死についての発言だと思われるため、その2つについて検討する。

エピソードの内容は、ひとつには、言及の対象が死者か生者かという観点から分類できる。まず、死者に対して言及したエピソードは33件見られた。そのうちの31件は祖父母・曾祖父母の死についてであり、彼らが亡くなったり、葬儀に出たりしたのをきっかけとして「おじいちゃん死んだの」「どうして燃やすの」などの発言があったのが26件と大半を占めた。次に多かったのが遺影を見ての6件の発言である。

生きている他者についてのエピソードは23件あり、母親を対象とするものが16件と圧倒的に多く（両親の双方に言及したものも一部含む）、回答者の大半が母親であることを考慮しても、子どもが母親の死を特に恐れるということが示唆された。他者が「いずれ死ぬ」ことに気づきかけは、「お母さんも年をとって死んじゃうの?」というように、加齢への気づきと関連していることが多かった。また、テレビで死の場面を見たことや、家族と死に関係した話をしたこと、誰かの死がきっかけとなることもあった。

さらに、いのちの有限性の認識と最も深く関連していると思われる自分の死に触れたエピソードは12件見られ、そのきっかけは他者の場合とほぼ同じだが、それに加えて、自分が病気になって死への不安を訴えたもの、クリスチャンの家庭の子で死んだら天国に行けるかどうかをたびたび尋ねるというものがあつた。

個々のエピソードを具体的に見ていくと、幼児が死に触れたときに意外なほど情緒的に深い体験をしていることが分かり、興味深い。おそらく、そこには亡くなった人との生前の関わり方や周囲の人々の対応が関連しているものと思われる。

3. 死の概念の形成

目的 子どもはいつ、どのようにして死を理解するのだろうか。死への気づきにまつわるエピソードを分析した結果、幼児は4歳頃に死に敏感になること、死への気づきは加齢への気づき（時間的展望の獲得）と連動していること、葬儀への出席などの経験がそうした気づきを促すことが示唆された。ここでは時間的展望の獲得と死の理解の発達が関連しているという仮説に立ち、幼児を対象に検討する。

方法 八戸短期大学附属幼稚園において、保護者から同意が得られた子どもに対して、預かり保育の時間を利用して面接を行った。対象者は年長児23名、年中児16名、年少児6名（月齢48～78ヶ月）の計45名である。面接では知能テストの絵画配列課題（2問）と、自主制作した時間的展望に関する絵画配列課題（4問）を実施し、その後で死の概念（不動性、不可逆性、普遍性）に関する質問（各2問）と、死に関連した経験についての質問（生き物を飼ったことがあるか、死なれたことがあるか、死者を知っているか、見たことがあるか）を行った。時間的展望課題は、①季節（四季）、②ニワトリの成長、③ひまわりの生長、④人の一生であり、④については赤ん坊から老後までの6枚の絵カードの並べ替えの後で、死を表す墓参りのカードと、死後を象徴す

る星のカードを追加するよう求めた。

結果・考察 時間的展望課題の④については、誕生から老いまでのストーリー化にパスする子どもは4歳後半から見られたが、半分以上の子どもがパスするようになるのは5歳の後半以降であった（図2）。これは奥田（2004）とほぼ共通する結果である。しかし、誕生から死までのストーリー化は6歳でも正答率が約5割であり（図3）、幼児には困難な課題であることが分かった。これについては対象を児童に拡大して検討する必要があるだろう。

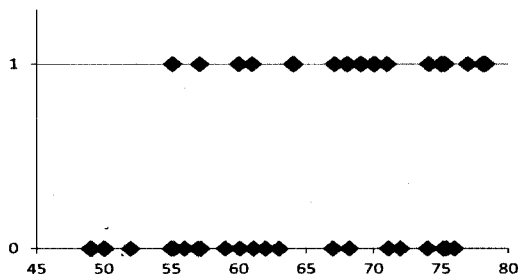


図2 誕生から老いまでの説明

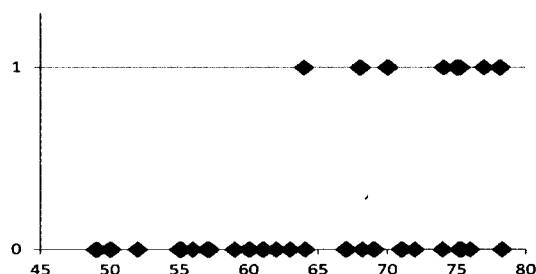


図3 誕生から死までの説明

死の概念に関しては、不動性の2つの質問には4歳から既に多くの子どもが正答しており、月齢による差があまりなかった。不可逆性の第1の質問「死んだ人は生き返るか」についても同様の傾向を示したが、第2の質問「死んだ人を病院に連れて行ったら生き返るか」に関しては半数以上の子どもがパスできたのは6歳（72ヶ月）以降であった。幼児に質問する場合、文言によって結果がかなり左右されることが改めて確認されたといえる。普遍性の2つの質問「生きている人はいつか死ぬか」「死なない人もいるか」についても、半数以上の子どもがパスできたのはやはり6歳になってからであった。

人の一生の時間的展望を獲得しているかどうかと死の概念との関連を検討するため、誕生から老いまでもしくは死までの説明ができるかどうかと、死の概念の6つの要素についてそれぞれカイ二乗検定を行ったところ、「生きている人はいつか死ぬ」の理解と時間的展望との関連に有意傾向が見られた。

また、死に関連した経験と死の概念との関連を検討するため、それぞれの経験と死の概念の要素についてカイ二乗検定を行ったところ、飼っていた生き物に死なれた経験が不可逆性の両方の要素と有意な関連があることが分かった。したがって、生き物を飼って死なれるという経験が「死んだら（たとえ病院に連れて行っても）生き返らない」ことの理解を推し進めるといえる。これは、施設や家庭で重視されている生き物飼育のいのちの学びとしての有効性を示すものといえよう。

引用文献

- 仲村照子 1994 「子どもの死の概念」『発達心理学研究』5
- 奥田雄一郎 2004 「時間のはじまり、物語のはじまり—時間的展望の発生とナラティブの発生
の関連についての実験的検討—」『中央大学大学院研究年報』34
- 高木慶子 2004 「子どもの「死の認識」の確立時期」『21世紀ヒューマンケア研究機構研究報告』10
- 若林一美 1986 「アメリカにおけるデス・エデュケーション」アルフォンス・デーケン『死を
教える』メヂカルフレンド社